
Christmas in Australia

おじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas in Australia

【NZカード】

N3010D

【作者名】 おじい

【あらすじ】

この作品は「いちにちひとつぶ」の番外編です。高校生、富下優成と仙石原未砂記がオーストラリアで過ごしたハートフル（？）でフィーリングなクリスマスの物語です。

1. 宮下優成の場合

これは高校一年生、宮下優成がオーストラリアで過ごしたクリスマスの記録だ。宮下優成がオーストラリアで過ごしたクリスマスの記録だ。

俺たちは学校の希望者をのみが参加する研修旅行でオーストラリアへ発つことになった。

オーストラリアの十一月は夏。俺たちはホームステイ形式で真夏のクリスマスを体感する。

ホームステイは二人一組で、俺は同じクラスの三条太郎と共に生活することになった。かつては女子と組んでも良かつたらしいが、いつからか、何やら事情があって、いや、情事があってダメになつたらしい。

今日はクリスマス。ケアンズ市内の店は殆どが休業。

ケアンズ

オーストラリア北部に位置する。地名はケアンズという人名に由来。

俺たちはホストマザーと一緒にクリスマスパーティーの会場に来ていた。

そこには市民がに集結してオーストラリア国内の歌手によるクリスマスソングのコンサートを聞いたり、みんなで食事や乾杯をしたりして聖なる夜を盛大に祝うのだ。

「富下あ、こんな日本の日本じゃ有り得ねえよなあ」

「ああ、こんな普通の町でこんなに人が集まって、みんなでクリスマスを祝う…」

俺と太郎は、この土地を訪れてから、カルチャーショックの連続だ。会場には人がいっぱい集まつていて、好きな料理をバイキング形式でいただきながらコンサートや各自のトークを楽しむ。

ギュッ！

！？

「おっす富下あ！」

「うわ…」

「何その反応！？ こんな異国之地で運命の再会じゃん…！」

「急に背後から抱き着くな

「コイツは中学の時に同じクラスで、同じ高校に進学した仙石原末砂記だ。^{さとうひづなみ}俺は無駄に騒がしいコイツが苦手だが、しかし友達だ。悪い奴ではない。

「周りをよく見なよ！　」うちでは知ってる人と会った時、抱き着くのは普通だよ？」

「ああ、まあな。それと運命の再会つて、学校出発する時から一緒だろが」

確かに、周りのオーストラリアの人たちは会つとすぐに抱き合つ。

再会を喜んだり、素直に感情を表現出来たり、そんな事が普通に出来る国の人々、自然環境だつて素晴らしい。こんな日本じゃほほ有り得ない。というより、日本はその面に於いては悪い意味で特異な国だらう。

「おお、オタちゃん！」

「ああ、三条君」

また新たにメンバーが会場にやつってきた。オタちゃんは中学の時から友達で、鉄道ファン。三条とは鉄道研究部の仲間だ。俺の周りには何故か電車が好きな人が多い。

「Lady's and gentleman!... Merry Christmas!...」

「Merry Christmas!...」

司会者の掛け声と共にパーティーが始まった。

「よし！… 歌うぞオタちゃん！」

「うん！… せーのっ！」

「クツハモハモハサツロ サツロサハサハモツハ
クハクハモツハ モツハサハクツハ モツハ

オタちゃんと三條が肩を組み何やら歌い出した。

「ここならバレないよなあオタちゃん！…」

「うん！… 言いたい放題だね！…」

「何なんだ？ 何が言いたい放題なんだ？ ってゆうか何の歌！？
まあいつか。今日はクリスマス！ 細かい事は気にしない！

「なあ仙石原あ、周りのオーストラリア人はよくこんなに英語ベラ
ベラ喋れるなあ」

「富下もそう思つた！？ そうだよね、凄いよね！ カッコイイね
え！…」

英語ペラペラで当たり前な事くらい分かっている。でも何だか凄かつた。

コンサートを聞いてると氣分がボーッとしてきて、幻想的な世界に連れて来られた気分になつた。

「ねえ、せつかくだから食べまくいひよーーー！」

「ああ、やつだな」

ホストマザーは仲間と英語で会話を。二条とオタナちゃんは電車の話。

周囲の人たちの会話についていけなくなつた俺は、仙石原と食事をすることに。

「やつこえば仙石原は誰と組んでる?」

「ヒタツチだよ。でもヒタツチ英語ペラペラでホストマザーの仲間と喋つて、最初は私も混じりつとしたんだけビビりくなつちやつて」

「ああ、正に今の俺の状況と同じだ」

俺がそう言つと彼女は共感を覚えたのか微笑した。こうして見ると結構可愛い。

「やつか! じゃあ残りもの回す盛り上がり!」

「ああ、せつかぐの真夏のクリスマスだ。今日はお前に会話を

「やつよ」

「じゃあ乾杯!」

「乾杯!」

「ねえ、富士つてどんな女の子が好きなの?」

またその話か。中学の時からずっと同じ質問してくれるんだよな。

「あ～あ、う～ん、一緒に居たいと思った人」

ベタな言い訳で逃げた。

「やうだよね！ 私もそう思つー！」

あら、共感された。

「ねえ宮下あ、この国の人達って、羨ましいと思わない？」

「ああ、俺もそう思つ」

会場には笑い声と歌声が響き、歓喜に溢れた空氣に包まれている。みんな何を気遣う訳でもなく、心の底からこの聖なる夜の夢のよくな時間を楽しんでいる。これこそパーティーと呼ぶに相応しい。

クリスマスつて、こんなに楽しいのか…

今この場が楽しいのは雰囲氣のせいだけじゃない。むしろ俺にとってこの雰囲氣は苦手な筈だ。それはみんなが盛り上がりしている中、口数少ない俺は独り取り残されるような気分になるからだ。今日この場だつてホストマザーや三條とオタちゃんの話についていけなく

なつて孤独感がある。

では何故楽しい？

「むやすたあ、せつかくだからむおつと食べよ～」

「口に物含みながら喋るな」

下品な女だ。

「S u g u n a r i - T a r o ? G o b a c k h o m e !

(優成、太郎、帰るわよ)「

「オーケー。じゃあ俺、帰るわ」

「うん。今日はありがとね！ 宮下のおかげで一人にならなくて済んだよ！」

そつか、そういう事か。

ようやく気が付いた。今日楽しかったのは苦手な箸の「コイツ」が居たからだ。付き合ってやつていたつもりが、逆に自分が付き合つてもらつていたのか？

「いや、俺の方こそ。今日は仙石原が居て良かつた」

「へへへえ～、照れるなあ～。じゃあまたクリスマス一緒にやろうね！」

「ああ、そうだな」

アド交換をしたが、時間が経てば学校でクラスが離れている彼女は、きっとまた俺にとつて苦手な存在になつてしまつ。彼女は特別進学科の3組、俺は機械科の20組。離れ過ぎだ。まあ四月になれば他の科へ移動出来る制度はあるのだが。

本当はそれよりも、今ままの仲が続けば本望だ。カノジョ持ちの身で、異性に対しても良くしようなど言えない。いや、カノジョが居る事を言つて訳にしている。

でもきっと、コイツとならまたいつか親しくなれる時が来る。

そんな気がする。

「富下あ

「ん？」

彼女は俺に微笑みながら言つた。

「メリークリスマス」

俺は一瞬フリーズした。

「メリー、クリスマス」

「こちこちひとつぶ」第一話に続ぐ。

2 仙石原末砂記の場合（前書き）

一話毎と同じ日、同じ場所での出来事を末砂記の日線で描いています。

2 仙石原末砂記の場合

私は神奈川県湘南の高校に通う高校一年生、仙石原末砂記です！今は学校の研修旅行でオーストラリアのケアンズに来てします！なんと今年は真夏のクリスマスを体感しちゃいますよ～お～～

ここはクリスマスパーティーの会場。市民のみんなが集まってコンサートを聴いたりお食事をしながらホーリーナイト（聖なる夜）を祝うんです！今日はホストマザーたちとパーティーに同席させてもらうことになりました。食べまくりの予感がしてきました！

「末砂記い、食べ過ぎちゃダメだよ？」

親切に私に忠告してくれたのは小さい時からずっと一緒に女友達、
大瀧漫地ちゃん、通称ヒタッチです！

「まあまあ今日ぐらいいいじゃない！それにしても凄いなあ。周りの人達は英語ペラペラだよ！」

「当たり前だよ。英語圏なんだから」

「でもあんなに達者に喋らると圧倒されない？」

「そうだね。じゃあ私も混じってみるー。」

あーっ！…ヒタッチ英語ペラペラだー！！ダメだ。私、孤立した……スタンドアローンだ……まずい、まずいですぞ～お？せっかく

オーストラリアに来たのにクリスマスの夜を無口で過ごす？マジ有り得ねえべ？

う！ そうだ！ おんなじ学校の人 が 来るかも しんないからさ が してみよ

あつ！早速みくつけた！

よし、ここはオーストラリアだし、後ろから抱き着いちゃえ！

ナニツイ

「おひすく聞くよ。」

二二二

「何その反応！？」んな異国の地で運命の再会じやん…！」

「急に背後から抱き着くな」

私が抱き着いたのは中学の時に同じクラスで同じ高校に進学した宮下優成。（みやしたすぐりなり）中学の時はキノコ頭で、ダサい髪型だつたけど、今は髪型変えて少しイケメンになつたみたい。実は彼、私の片想いの相手なんです！でも彼は私の事が苦手みたい。もっと近付いて、名前で呼び合つたりしてみたいなあ……

「周りをよく見なよ！」つちでは知つてゐる人と会つた時、抱き着くのは普通だよ？」

「ああ、まあな。それと運命の再会つて、学校出発する時から一緒に
だろうが」

きつと彼も私みたいに孤立しちゃつたんだ。これはチャンス！？一歩でも近付くぞおー！

「なあ仙石原あ？周りのオーストラリア人はよくこんなに英語ベラベラ喋れるなあ」

「凄いね！カッコイイねえーー！」

うそつ！？私と同じ事考えてんじやんーーあー、なんかヤバいかも…この会場の雰囲気とコンサートが私のハートを麻痺させてる…メロメロだよ…宮下あ、私の気持ち気付いてよお…

でも、きつと呟くしたらあつせつフラれかひきつんだらつた。ならこのままの方がいいや。

とつあえず、折角一人になれたから一緒に食事じよつー！

「ねえ、せつかくだから食べまくひつよーーー！」

「ああ、そうだな」

こんな些細な事がきつと、一生心に残る思い出になる。この恋が例え実らなくても、きつと美しい思い出になる。

諦める気なんかないけどねー！

「そりいえば仙石原は誰と組んでるん?」

「ヒタツチだよ。でもヒタツチ英語ペラペラでホストマザーの仲間と喋つてて、最初は私も混じりつとしたんだけビビりくなっちゃつて…」

「ああ、正に今の俺の状況だ」

「そつかー!じゃあ残りもの同士盛り上がりー。」

「ああ、せつかくの真夏のクリスマスだ。今日くらいはお前に付き合つよ」

「じゃあ乾杯つーー!」

「乾杯つー!」

「ねえ、富下つてどんな女の子が好きなの?」

自分とは違うタイプの子が好きなのは分かつてゐる。けど、つい聞いてしまつ。

「あーあ、うーん、一緒に居たいと思つた人」

えつー?意外!大人しい人とか清楚で奥床しいとか言つと思つたのに。でも、ベタだけど目的を射た答へだ。

「そりだよね!私もそう思つー!」

「ねえ富下あ？なんかこの国の人達って、羨ましい」

「ああ、俺もそう思ひ」

この国の人達は、仲間との再会を喜び、純粹にパーティーを楽しんでいる。クリスマスの価値観も日本とは大分違う。私は何より、日本人みたいに柵のない、この国のピュアなハートに憧れた。

私は食にも生活にも困らない貧しい国に生まれたんだ…

「むやすたあ、せつかくだからむおつと食べよお～」

「口に物含みながら喋るな」

「Sugunari Taro? Go back home! (優成、太郎、帰るわよ)」

富下たちのホストマザーが呼び掛けた。

「オーケー。じゃあ俺、帰るわ」

帰つちやうのか…細い糸を引き切られる様で切なくなってきた。でも楽しかった。彼が居てくれたお陰で今までで一番楽しいクリスマスになった。

「うん。今日はありがとうね！富下のおかげで一人にならなくて済んだよ！」

そもそも私が彼を好きになつたのには、こんなプロセスがある。

私は中学生の頃、彼にこうつ尋ねた。

「ねえ宮下あ、私の事、どう思つ?」

やつぱり一瞬困った顔をした。でも直ぐに答えてくれた。

「友達つて、思つていいかな?」

私は持ち前の明るさで、誰とでも直ぐに喋れる。でも本当に友達と呼べる人は少ない。だから彼の、その控え目な言葉が素直に嬉しかった。むしろそれはこっちの台詞。こんなうるさい私で良ければ、是非友達になつて下せー!

それから私は彼に興味を持つようになり、次第に恋へと変わつていった。

「いや、俺の方こそ。今日は仙石原が居て良かった」

へつー?私が居て良かった!?彼から私に對してそんな言葉が聞けるなんて有り得ないと思つてた。あの時、私の事を友達だと思つてくれていたのは本当だつたんだ。それをやつと確信出来た。私はその言葉を聞くと同時に自ずと笑みが零れた。

「へへへえ~、照れるなあ~。じゃあまたクリスマス一緒にやろうね!」

「ああ、やうだな

今日はクリスマス！定番の台詞をまだ言つてなかつた事に気が付き、別れ際に彼を引き止めた。

「畜生！」

「ん？」

「メリークリスマス」

彼はあの時のような困った顔で、そしてやはう直ぐ返事をした。

「メリー、クリスマス」

やつぱり諦められないや。いつか、絶対に告白しよう。私はそういう心に誓つた。

「こちにちひとつひぶ」第一話に続ぐ。

2 仙石原末砂記の場合（後書き）

クリスマスという事で、こんな企画をやつてみました（^_^；
短い話でしたが何か感じ取つていただけるものはありましたでしょうか。

それではMerry Christmas!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3010d/>

Christmas in Australia

2010年10月8日12時13分発行